（様式１－１）

平成２８年度

いしかわニュースーパーハイスクール

事業報告書

学校名：石川県立七尾高等学校

１．「学校設定科目」での取組

１－１　科目名「論述錬磨」

（１）ディベート講習会

①参加生徒　文系フロンティアコース　１年　４０名

②目指すべき姿・つけたい力

ディベートの技法を学ぶことで批判的思考力・論理的表現力育成の素地を作る。

③日時内容

日時：１月２３日（火）１４：１５～１６：０５

講師：西部直樹　氏（全国教室ディベート連盟常任理事）

内容：　論点の整理法や客観的資料の使い方等について専門の指導者の講義を受け、実践を通してディベートの基礎を学んだ。

ディベートの講義を聞く様子

ミニディベートを行っている様子

④生徒の変容

競技としてのディベートの手法やディベートに取り組む目的（構築力・判断力・多角的視点といった論理的思考力の醸成及び理解力・傾聴力・発表力といったコミュニケーション力の向上）を理解することができた。また、全国大会決勝時のビデオを用いてフローシートを取りながら、言葉の定義、データ（証拠資料）に基づいた主張と根拠、立論の作り方、質疑応答を通して、論理的な議論を展開するためのスキルを体験し理解することができた。

＜生徒アンケートより＞

・今回のディベート講座で学んだことは、「ディベート＝相手の思考や意見を理解して相互に考えを深め合うコミュニケーション」であるということだ。また、議論をする上で、説得すべきは相手ではなく審判であるという点を面白いと感じた。

・ディベートでは相手と議論し合うことが大事であり、自分の意見を延々と話しているだけでは理解が深まりません。相手の意見や根拠をしっかり聞き、メモを取り、同時に質問や反論を考え、相手と議論を交わすことで理解が深まります。このスキルを身に付けディベートの時だけではなく、日常生活の中でも活用していきたいと思いました。

・的確かつ素早い発言をするためには日頃から物事を多角的視点で見ることが大切だと思う。広い視野を持つために新聞や本を積極的に読み、バランス感覚のある思考ができる人になりたいと思った。

⑤改善の方向性や取組

ディベート講座を受講した後、実際に生徒がディベートに取り組むことができる機会を早い段階で設定することができればよかった。次年度は学校設定科目「論述錬磨」の授業とディベート講座を効果的に連携できるよう講座を開講する時期を検討する。

１－２　科目名「スピークアウト」

（１）留学生との交流①

①参加生徒　文系フロンティアコース　１年　４０名

②目指すべき姿・つけたい力

多様な文化的背景を持つ留学生と意見交換することで、グローバルな視点を得るとともに、英語によるコミュニケーション能力の伸長を図る。

③日時内容

日時：６月１８日（土）１３：３０～１５：３０

講師：金沢大学の留学生　２０名

内容：　金沢大学に在籍する留学生へ能登を巡る旅行プランのプレゼンテーションを行い留学生からの質疑に英語で応じた。

④生徒の変容

能登を巡る様々な旅行プランについてのプレゼンテーションを留学生に対して行うことで生徒の英語によるコミュニケーション力を高めることができた。また、留学生との対話を通して外国の方から見た能登の印象や可能性について理解を深めることができた。

＜生徒アンケートより＞

・留学生の質問にしっかり答えられ、理解してもらえたことが一番嬉しかった。今私が使える英語では全てを説明することが難しかったので、もっといろんな表現を覚えて使えるようになりたい。

・文法も大切だが、やはり伝えることの方が大切だと感じた。聞いてくれた留学生が前のめりになってくれたので私たちも話しやすく、ジャスチャーも交えながらできました。

・実際に英語を話している留学生と交流することで、英語をもっと勉強したいと思った。留学生は質問をたくさんしてくれたので自分もそれを見習いたいです。

⑤改善の方向性や取組

生徒がプレゼンテーションをする際、原稿を読むことに終始していた生徒が少なからずいたので事前準備を徹底し、より実践的なコミュニケーションの場に改善する。また、留学生からの質疑応答の時間や生徒と留学生が自由に英語で交流できる時間をより多く確保する。

質疑応答する様子

プレゼンする様子

（２）留学生との交流②

①参加生徒　文系フロンティアコース　１年　４０名

②目指すべき姿・つけたい力

これまで学んできたことを踏まえて自分の考えや意見を聴衆の前で自信を持って英語で分かりやすく論理的に発信することができる。

③日時内容

日時：２月１３日（月）１３：１５～１４：０５

講師：金沢大学の学生　（留学生４名、本校ＯＧ１名）

内容：　金沢大学に在籍する留学生に、「私を変えた異文化体験」というテーマでスピーチを行い、内容及び抑揚やジェスチャー、アイコンタクト等について具体的な助言を受けながらよりレベルの向上を図った。

④生徒の変容

＜生徒アンケートより＞

・授業で練習したときには気づけなかった指摘を留学生からしてもらい、非常に参考になった。文章の構成や表現も、自分で分かったつもりで内容を書いているが他者に聞いてもらうことで伝えたいことを過不足なく表すことの難しさを実感し、今後頑張ろうと思った。

・中学生でも書けそうな英文ばかりを書くのではなく、自分の考えをより高いレベルで表現しようとしたとき、やはり英文法は大切だと分かった。文法は覚えるだけで使えない知識ではなく、どんどん使って身に付ける実用的な知識だと分かった。

＜留学生のコメントより＞

・生徒の英語学習への意欲と文章構成力の高さに驚いた。また、どの生徒もアドバイスに真剣に耳を傾けてくれた。

・一方向のみを見るのではなく聴衆全体を意識しながら表情豊かに話すとよりよいスピーチになると思う。

⑤改善の方向性や取組

時間設定が短く、スピーチ指導に終始した。様々な国籍の留学生が参加する授業である点を活かして、多様な文化的背景を活かした国際理解・異文化交流をテーマとしたディスカッションをスピーチ指導に加えて実施することを検討する。

参加した金沢大学の学生

グループでのスピーチ指導

（３）ＭＪＦとの交流

①参加生徒　文系フロンティアコース　１年４０名　　２年生４０名

②目指すべき姿・つけたい力

異文化の人々と交流することで、外国の歴史や文化に対する興味を喚起し、また、日本文化を発信する機会とした。

③日時内容

日時：平成２８年7月２８日（木）１１：４０～１５：３０

講師：アメリカ・モントレー市より高校生　２１名

内容：　日本食を協働して作り、英語で積極的にコミュニケーションする態度を養う。また、プレゼンテーションやワークショップに実践することで文化的背景の異なる人たちへ日本文化や能登に関する情報を発信する。

④生徒の変容

太鼓演奏の披露とその文化的背景の説明、折り紙や剣道といった日本文化や武芸をアメリカの高校生に分かりやすく説明するための事前準備を入念に行った。この学習を通して生徒自身が日本文化を深く理解し、異文化交流をすることの楽しさや重要性に気付くことができた。

＜生徒アンケートより＞

・外国人の方が自分に話しているときは、うなずいたり “I see.” などと共感したりすることが大切だと感じた。言語は違っても、なんとなく伝わる気持ちがあって、とても楽しかった。

・折り紙体験のとき、出来あがったものを見てうれしそうに “Thank you！” と言ってくれたときは文フロに入ってこの体験が出来てよかったなと心から思いました。この体験を通して、国が違い、使っている言葉が違っても、心は通じあい、一緒に楽しい時間をすごすことができるのだなと思いました。

・日本文化を紹介するとき、アメリカの高校生たちが楽しそうに活動していたのが印象的で、日本の文化は外国の人々にも認められるものなのだと思うと誇らしくなりました。今回の交流を通して外国と日本の違いだけでなく、日本の良さを改めて見つめることができたので良かったです。

日本文化を通した交流

お互いに質問しあう様子

（4）アフガニスタン・イスラム共和国ＩＦＲＣメンバーとの交流

①参加生徒　文系フロンティアコース　１年４０名　　２年４０名

②目指すべき姿・つけたい力

異文化の人々と交流することで外国の歴史や文化に対する興味を喚起し、また、日本文化を発信する機会とする。

③日時内容

日時：平成２８年１１月２日（水）１０：００～１３：００

講師：アフガニスタン赤新月社メンバー　２名

内容：　日本文化のプレゼンテーションを英語で行い、それらの活動を通して日本文化への理解を深めるとともに、ＩＦＲＣメンバーとの交流を通じてアフガニスタン・イスラム地域への理解を深めた。

④生徒の変容

アフガニスタンの様々な現状を事前学習する中で生まれた疑問を、共通言語である英語で質問し、コミュニケーションを図ることで視野を広げることができた。

アフガニスタンについて質問する様子

日本文化について説明する様子

２．「総合的な学習の時間」での取組

（１）能登の里山里海特別講義

①参加生徒　文系フロンティアコース　１年４０名　２年４０名

②目指すべき姿・つけたい力

能登地域が世界農業遺産に認定された経緯を知り、その国際的意義や未来可能性について理解を深める。

③日時内容

日時：６月９日（木）　１０：４０～１２：３０

講師：宇野文夫　氏　（金沢大学地域連携推進センター・特任教授）

内容：　世界農業遺産認定のプロセスについてビデオ映像を交えながら解説し、能登の里山里海が先進国ではじめて世界農業遺産に認定された意義や各地域が取り組む保全活動や利活用の現状、その潜在的可能性について講義した。生徒は講義の後能登が持つ可能性についてグループで議論した。

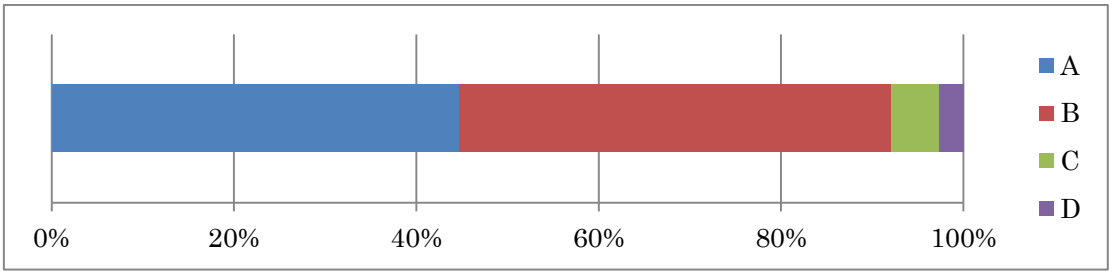
グループ協議に加わる宇野氏

認定の意義を語る宇野氏

④生徒の変容

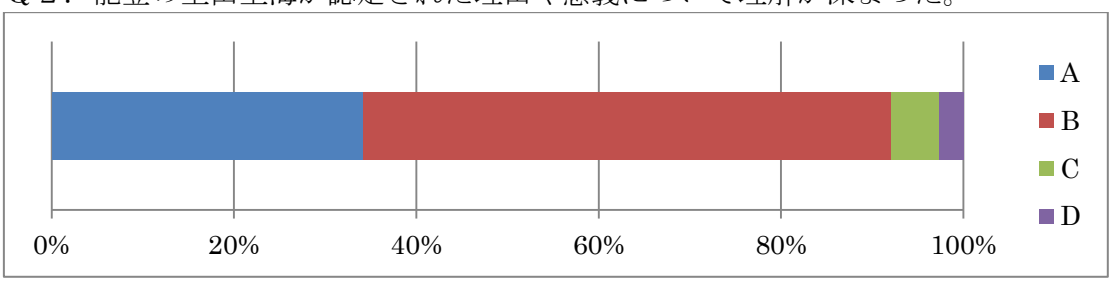
＜生徒アンケートより＞

Ｑ１．能登に誇りを持つことができた。



Ａ　とてもそう思う　Ｂ　そう思う　Ｃ　あまり思わない　Ｄ全く思わない

Ｑ２．能登の里山里海が認定された理由や意義について理解が深まった。



Ａ　とてもそう思う　Ｂ　そう思う　Ｃ　あまり思わない　Ｄ全く思わない

・独自の文化は日本にも他の地域にもたくさんあるが、能登の文化は自然と密接に結びついており、なおかつ、持続可能な社会の基盤になっていることに驚きを感じた。
・外国人観光客が能登の生活や文化に触れることで本当の日本を知ることができると言っていたことに納得し、誇りを持つことができた。
・能登は田舎だが、そのゆっくりとした開発によって逆に残せる伝統や自然を後世にうまくバトンタッチできていたということが分かった。
・現代において美しい自然や伝統的な農耕儀礼を継承している能登はとても貴重で素晴らしい地域だと思いました。

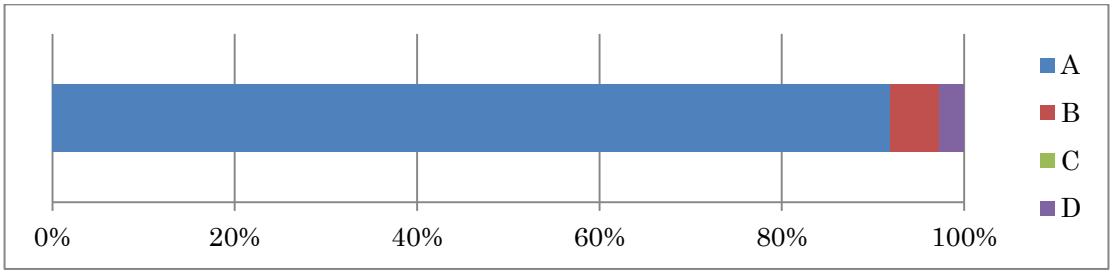
（２）国際理解に係る講演会
①参加生徒　文系フロンティアコース　１年４０名　２年４０名
②目指すべき姿・つけたい力
　グローバルな視点から自国を見つめ直すことを通して多様な価値観に気づくとともに、物事の本質を見極める考え方を学ぶ。
③日時内容
　日時：９月８日（木）１０：４０～１２：３０
　講師：スザーン・ロス　氏（輪島塗漆芸家）
　内容：　文系フロンティアコース２年生がイギリス出身の芸術家からイギリスの伝統文化についての講義を受けることで、日本文化を見つめ直し、その価値を再発見した。

講師のスザーン・ロス氏

ロス氏による発表のアドバイス

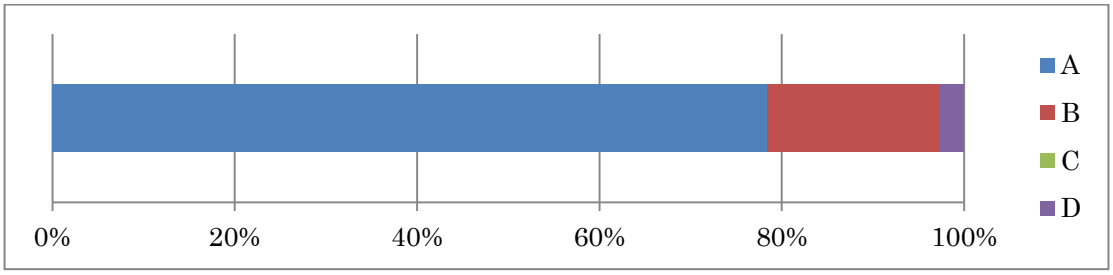
④生徒の変容

＜生徒アンケートより＞
Ｑ１．日本文化とイギリス文化の違いについて理解できた。



Ａ　とてもそう思う　Ｂ　そう思う　Ｃ　あまり思わない　Ｄ　全く思わない

Ｑ２．日本文化の素晴らしさを再認識した。



Ａ　とてもそう思う　Ｂ　そう思う　Ｃ　あまり思わない　Ｄ　全く思わない

・日本人が自分たちの文化をいかに理解していないか、身に染みてわかりました。無くなってからでは遅い。若い人が日本文化に気づくことが大切だと感じました。
・余白を活かし、作り手と使い手の間の心の結びつきを重んじる日本と、枠の中で自分の芸術を表現する外国では考え方が真逆で、日本の漆をはじめとした文化は外国人にとってあこがれであるという話はとても興味深く、勉強になりました。
・メディアに頼らず、自分の目でいろんなものを見てそれを通じていろいろなものを感じたり、理解することが大切なのだと思いました。
・自国と他国は違っていて当たり前であり、世界どこも一緒なら行く意味がない。良い悪いではなく、違いや一緒なところを見つけることが大切だというスザーンさんの言葉に感動しました。

⑤改善の方向性や取組

外国人の視点から日本について語ってもらったことで、複眼的に物事を見ることの大切さ、日本文化の持つ素晴らしさについて再認識することができた。来年度もこの方向性で人選し、取組の継続を図る。

３．特色ある教育活動

（１）中間発表会

①参加生徒　文系フロンティアコース　１年４０名　２年４０名

②目指すべき姿・つけたい力

文系フロンティアコース２年生が海外研修を前に中間発表会を行い、他者から様々な観点で質問、意見、アドバイスを受け、批判的思考力や実践的な表現力の育成につなげる。

③日時内容

日時：９月８日（木）１０：４０～１２：３０

助言者：スザーン・ロス　氏（輪島塗漆芸家）
　　小路晋作氏、小山明子氏（能登里山里海マイスター育成プログラム教員）

内容：　文系フロンティアコース２年生が能登の里山里海について探究してきた内容を、１年生や本校ＯＢ２名、助言者３名を前に、英語でプレゼンテーションを行った。

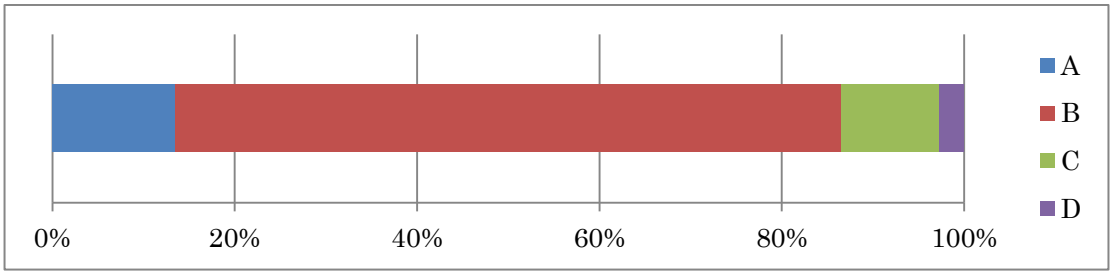
アドバイザーから意見を聞く

１年生や本校ＯＢに英語で発表

④生徒の変容

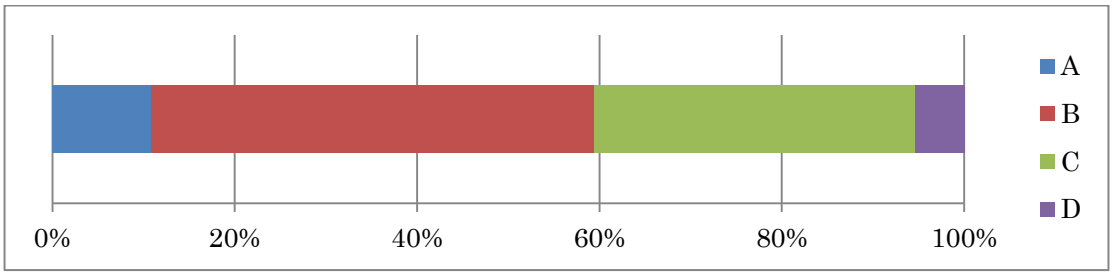
＜生徒アンケートより＞

Ｑ１．しっかり発表できた。（２年生のみ）



Ａ　とてもそう思う　Ｂ　そう思う　Ｃ　あまり思わない　Ｄ　全く思わない

Ｑ２．助言者の質問にしっかり答えることができた。（２年生のみ）



Ａ　とてもそう思う　Ｂ　そう思う　Ｃ　あまり思わない　Ｄ　全く思わない

・２年生の発表は、内容やデザインはもちろん、発音や間の取り方に気をつけていたので感銘とあこがれの気持ちがわいてきました。（１年）
・調べてあったことはうまく伝えることができたと思うが、別の角度から問われた質問には英語で答えることができなかった。（２年）

⑤改善の方向性や取組

英語で発表や質疑応答を行ったが、特に１年生には予備知識がなく、質問するのは難しい面があった。また、２年生についても調べていない内容の質問については英語で答えることに苦心していた。前者の課題については事前に資料を配付する、１年生に限っては質問を日本語も可とすることで対応する。後者の課題については事前に質問を想定させ、準備する時間を確保する。

（２）海外研修

①参加生徒　文系フロンティアコース　２年　３８名

②目指すべき姿・つけたい力

・英語発祥の地イギリスでの体験的・実践的研修を通して、本校１・２年次で学習し、身につけた英語活用能力・英語コミュニケーション能力を向上させる。
・異文化交流体験を通して、他者を尊重しつつ、かつ、積極的に自分の考えや主張を伝えようとする態度を養う。併せて、礼儀やマナーの意義について考えさせ、国際社会で活躍できる真のリーダーとしての資質を育成する。
・イギリスの伝統的な側面と、多民族国家としての側面を体験することによって、他国の歴史や文化、習慣を尊重する態度を養うとともに、国際的・多角的な視点に立って我が国を捉える豊かな知性・感性を涵養する。
・研修全体を通し、里山里海に代表される能登の風土や石川の伝統文化・工芸を現地に紹介し、ふるさとの魅力を発信する機会とする。さらに現地の観光政策についてフィールドワークを実施し、能登の観光政策に活かす方策を探究する。

③日時内容

日数	月/日	スケジュール
1	10 月 3 日 （月）	北陸先端科学技術大学院大学（JAIST） 国際連携・国際交流担当学長補佐　川西俊吾教授による ワークショップ及び学生とのセッション 空路ドバイに向けて出発　（機内泊）
2	10 月 4 日 （火）	飛行機　乗り換え 空路ガトウィック空港に向けて出発 ホームステイに向けてオリエンテーション 各家庭へ　（ホームステイ）
3	10 月 5 日 （水）	チャッツワース訪問、グリーンツーリズム研修 里山里海の探究活動についてプレゼン ホストファミリーの家に帰宅　（ホームステイ）
4	10 月 6 日 （木）	ロンドン市内研修(歴史的建造物や資料から文化財への知見を深める) ホストファミリーの家に帰宅　（ホームステイ）
5	10 月 7 日 （金）	オックスフォード大学生によるキャンパスツアー オックスフォード大学生に対して里山里海のプレゼンテーション及びディスカッション
6	10 月 8 日 （土）	終日ホストファミリーと過ごす （ホームステイ）
7	10 月 9 日 （日）	専用バスにて空港へ 空路ドバイに向けて出発　（機内泊）
8	10 月 10 日 （月）	空路日本に向けて出発 七尾高校到着後、解散

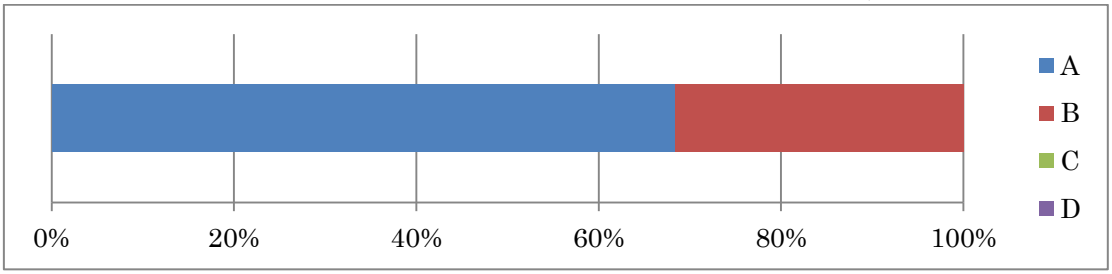
グリーンツーリズムについて研修

オックスフォード大学生との質疑応答

④生徒の変容

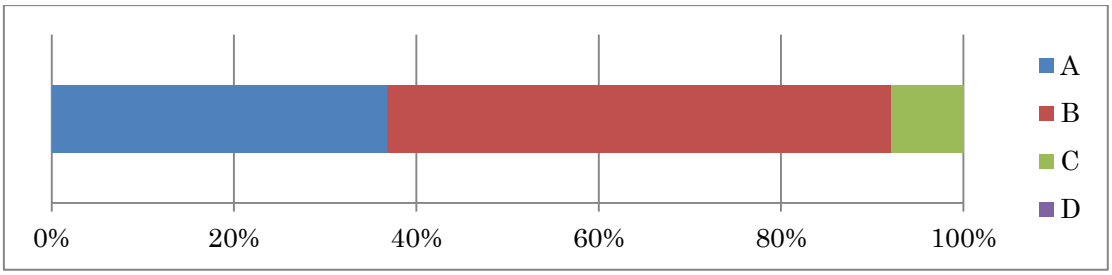
＜生徒アンケートより＞

Q１. 事前学習やホームステイを通じて、イギリスの文化について理解を深めることができた。



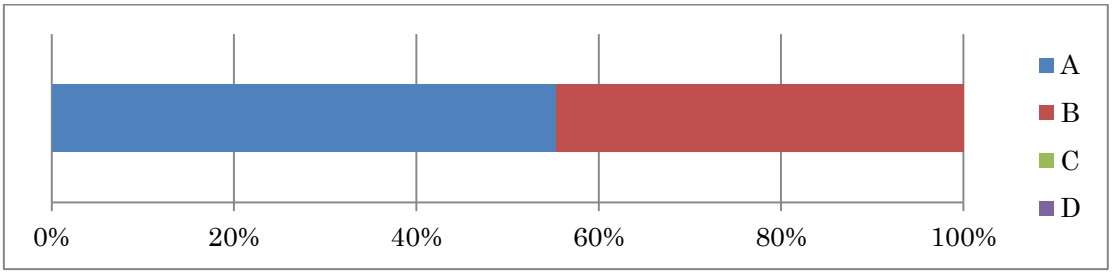
A　とてもそう思う　B　そう思う　C　あまり思わない　D　全く思わない

Q２．チャッツワースハウスでの研修では、グリーンツーリズムについて理解を深めることができた。



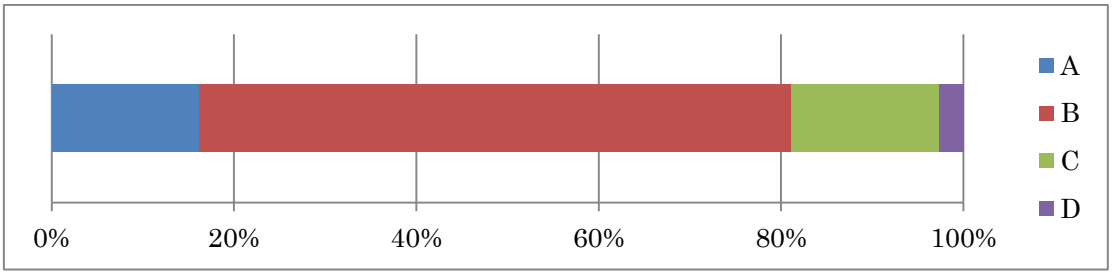
A　とてもそう思う　B　そう思う　C　あまり思わない　D　全く思わない

Q３．オックスフォード大学訪問を通じて、学ぶ意欲が高まった。



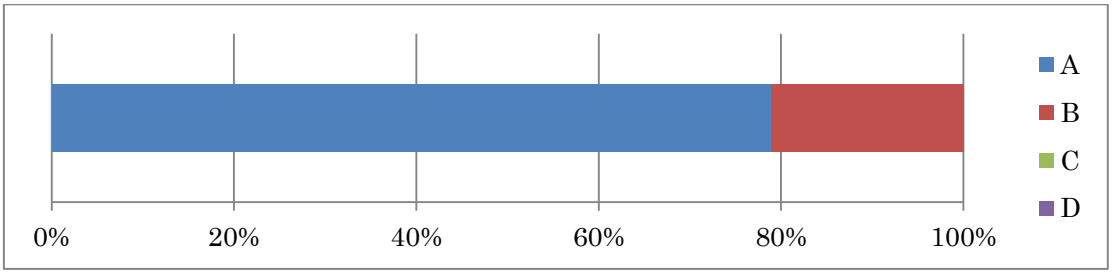
A　とてもそう思う　B　そう思う　C　あまり思わない　D　全く思わない

Q４．オックスフォード大学でのプレゼン発表に手応えを感じた。



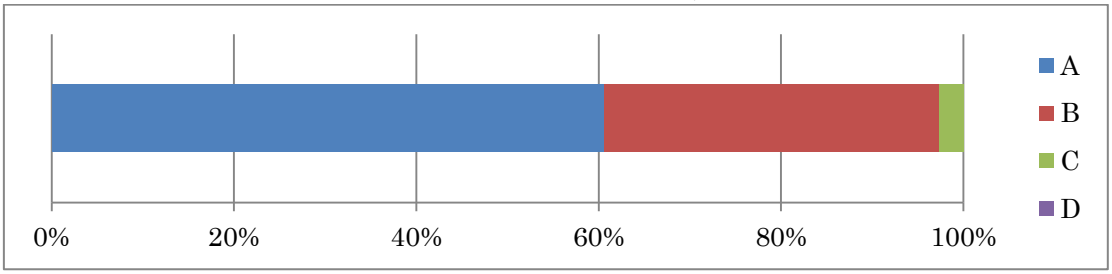
A　とてもそう思う　B　そう思う　C　あまり思わない　D　全く思わない

Q５．この海外研修で英語を話そうとする意欲や積極性が身についた。



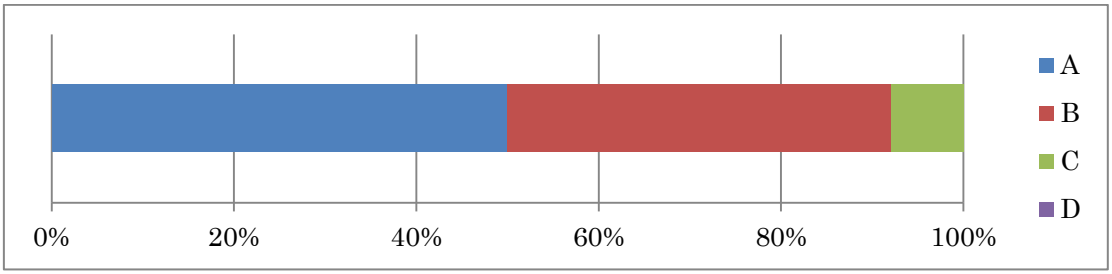
A　とてもそう思う　B　そう思う　C　あまり思わない　D　全く思わない

Q６．事前学習を通じて、能登の里山里海について理解を深めることができた。



A　とてもそう思う　B　そう思う　C　あまり思わない　D　全く思わない

Q７．海外研修を通じて、能登の里山里海を紹介することができた。



A　とてもそう思う　B　そう思う　C　あまり思わない　D　全く思わない

・海外で、現地の人と交流することや、異文化に触れ、また自分たちの文化を発信することの楽しさを実感できて、また海外へ留学したり、海外で仕事をしてみたいという興味がわきました。
・チャッツワースでは間伐材を使ったチップで火力発電するなどスケールの違いを感じました。
・イギリスの人々のもてなしに感動し、相手への思いやりはどこでも共通だと感じました。
・ロンドンやオックスフォードは古いものと新しいものが調和していて、こういう都市の在り方も魅力的だと感じました。
・オックスフォード大学ではどんどん質問されて話が弾んだので、とても楽しい時間を過ごすとともに大変刺激を受けました。
・ロンドン市内研修では現地の人とお店や街中で自然に話すことができ、自分の英語力を試すことができた。
・大英博物館は、所蔵品や規模、醸し出す雰囲気も全てが日本と違い、人生にまたとない貴重な経験となった。

⑤改善の方向性や取組

今年度はグリーンツーリズムの研修を取り入れた。現地では興味深い取組を行っており、参考となる部分もあったが、やはり日本で考えているグリーンツーリズムとは隔たりがあり、時間的ロスも大きかった。来年度は今年度の反省を活かし、生徒がもっと自主的に活動できる取組を検討する。例えば、現地の人々に能登の里山里海に対してアンケートを取ったり、大学生との交流ではもっと調べた内容以上のことについて議論ができるように事前に資料を送ったりすることを検討する。

４．その他の取組

（１）スーパーグローバル大学講演会

①参加生徒　３年全員　２３７名

②目指すべき姿・つけたい力

これからの大学教育で必要な教養やスキルは何か具体的なイメージを生徒に持たせ、進路意識の高揚につなげる。

③日時内容

日時：９月７日（水）　１５：１５～１６：３０

講師：柴田正良　氏　（国立大学法人　金沢大学副学長）

内容：　講演会を通して金沢大学が目指す理念や取り組みの状況について理解するとともに、本校卒業生でもある金沢大学の学生に自身の留学体験について話してもらい、留学の意義について学んだ。

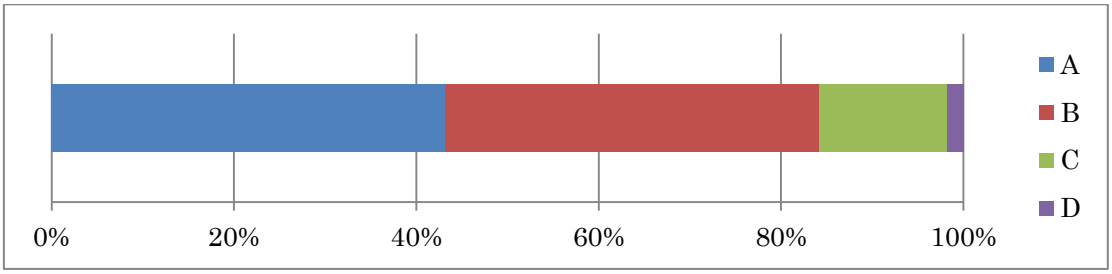
柴田氏の講演

金大生（本校ＯＧ）による留学体験発表

④生徒の変容

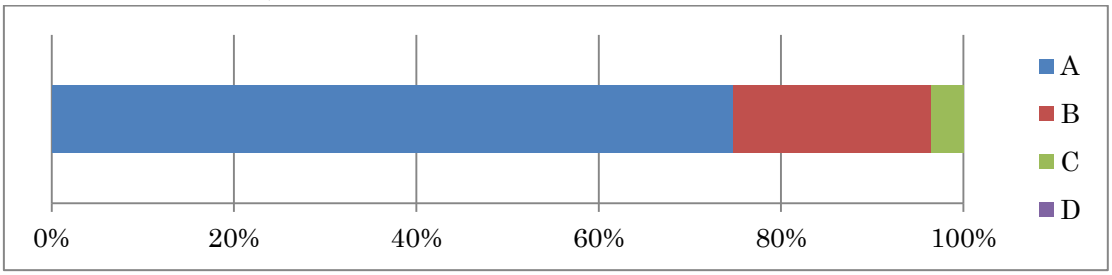
＜生徒アンケートより＞

Ｑ１．金沢大学の取組について理解できた。



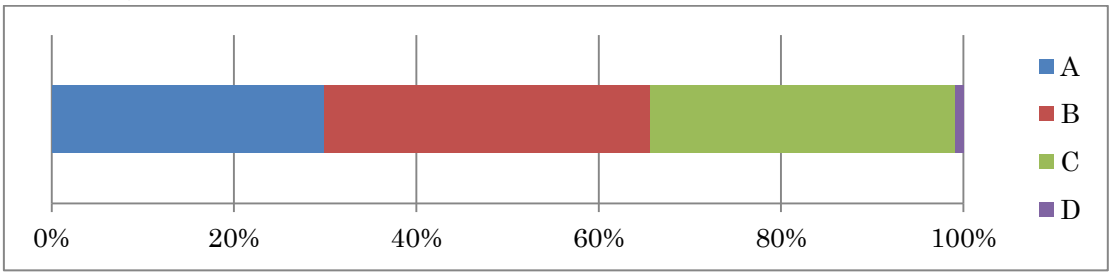
Ａ　とてもそう思う　Ｂ　そう思う　Ｃ　あまり思わない　Ｄ　全く思わない

Ｑ２．留学について魅力を感じた。



Ａ　とてもそう思う　Ｂ　そう思う　Ｃ　あまり思わない　Ｄ　全く思わない

Ｑ３．学習意欲が高まった。



Ａ　とてもそう思う　Ｂ　そう思う　Ｃ　あまり思わない　Ｄ　全く思わない

・日本の高水準の生活環境の中で過ごすと外国人との競争に負けてしまうので国際社会で活躍するための力をつけられるのがグローバル大学だと思いました。
・金沢大学の国際化に対する意欲が感じられる講演でした。七高出身の方の留学の話を聞いて身近なものとして留学を捉えることができた。

・グローバル人材とは知識だけを詰めるという印象があったけど、実習を増やすと聞いて興味がでました。英語がとても必要であることがよく分かり、理系文系関係なく大事であることが分かったので今から頑張らなければと思いました。今日の講演を聞いてこれからの勉学に活かせる内容だったのでとても参考になりました。
・地元の大学よりも都市部の大学へ行きたいという気持ちが強かったのですが、今日の講演を聞いて金沢大学っていいなと思いました。ぜひ留学がしたいと思いました。

⑤改善の方向性や取組

地元である金沢大学の取組について理解を深めることができて良かったが、３年生に対して行う時期としては遅かった。来年度は大学に向けての意識が高まる総体後に行うことを検討する。

（２）スーパーグローバル大学講演会

①参加生徒　１年全員　２４０名

②目指すべき姿・つけたい力

これからの大学教育で必要な教養やスキルは何か具体的なイメージを生徒に持たせ、進路意識の高揚につなげる。

③日時内容

日時：２月１日（水）　１５：１５～１６：３０

講師：永野拓矢　氏　（名古屋大学教育基盤連携本部アドミッション部門所属、准教授）

内容：　講演会を通して名古屋大学が目指す理念や取り組みの状況について理解するとともに、高校で学んでおくべきことなどについて理解を深めた。

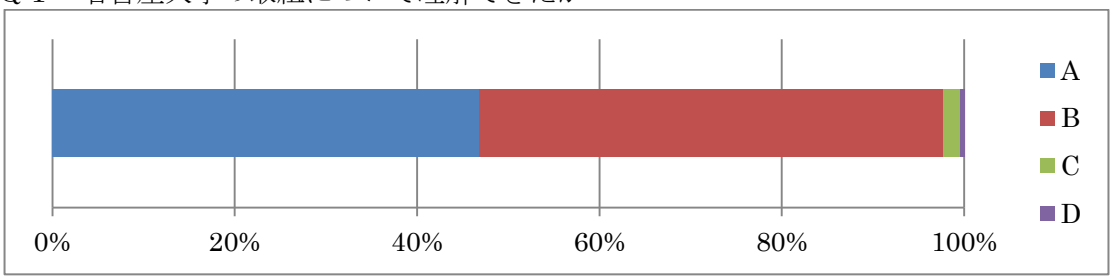
永野氏の講演

留学制度について質問する１年生

④生徒の変容

＜生徒アンケートより＞

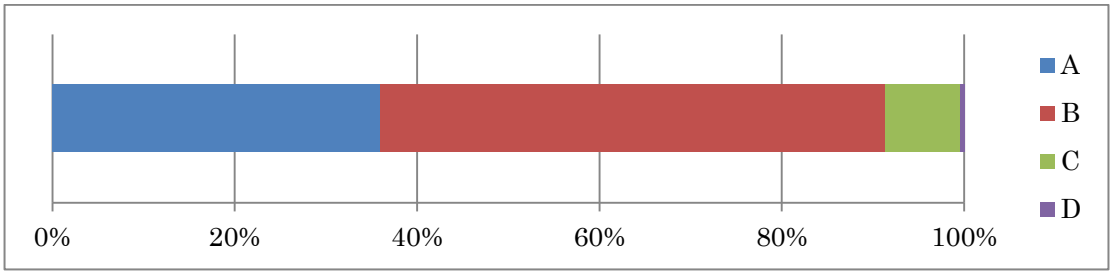
Ｑ１　名古屋大学の取組について理解できたか



A　大変理解できた　　B　理解できた

C　あまり理解できなかった　　D　まったく理解できなかった

Ｑ２　学習に対する意欲が湧いたか



A　大変湧いた　　B　湧いた
C　あまり湧かなかった　　D　まったく湧かなかった

・名古屋大学が世界のトップを目指している大学だということがよくわかった。留学生や海外派遣の数にも驚いた。世界とつながりたい、世界のことも考えていきたいと思う人にとっては貴重な経験が積める大学なのかなと思った。
・ＳＧＵでは、世界のトップレベルの大学と共同で最先端の研究をすることにより、世界に誇れる人材を育てられるのだとわかった。
・トップ型スーパーグローバル大学として、沢山の学生を海外に派遣したり、留学生を招き入れたりととてもグローバル化に対して積極的な大学だと思いました。
・今回の講座で私が印象に残ったことは、大学が目指す到達点が高いということです。平成３５年までに学生全員を海外に派遣するというところや、世界の大学ランキング１００位以内を目指しているということなど、高い目標を掲げていらっしゃったので、自分もまた高いところを見て努力できそうだと思いました。

⑤改善の方向性や取組

１年生は夏に金沢大学のオープンキャンパスに続いて大学のことを知る機会となった。スーパーグローバル大学としての取組だけでなく、高校での学び方や大学での学びについても話が及び、生徒にとっては高大のつながりを意識することができた講演会であった。アンケート項目の「意欲の向上」については「大変湧いた」の割合が比較的少なかったので、来年度は教授や学生の研究テーマを紹介するなど大学での学びを具体的に伝える内容を検討する。

（３）スーパーグローバル大学講演会

①参加生徒　２年全員　２３８名

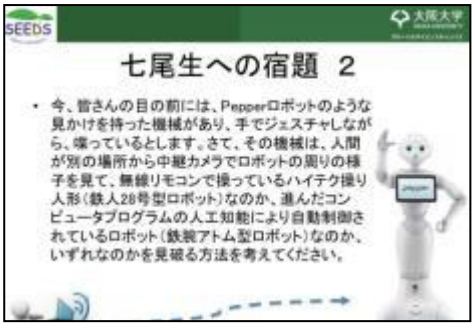
②目指すべき姿・つけたい力

これからの大学教育で必要な教養やスキルは何か具体的なイメージを生徒に持たせ、進路意識の高揚につなげる。

③日時内容

日時：２月１６日（木）　１５：１５～１６：３０
講師：佐藤宏介　氏　（大阪大学教育室員・全学教育推進機構長・基礎工学研究科教授）
内容：　講演会を通して大阪大学が目指す理念や取り組みの状況について理解するとともに、大学での学びの在り方について理解を深めた。

講演会の様子

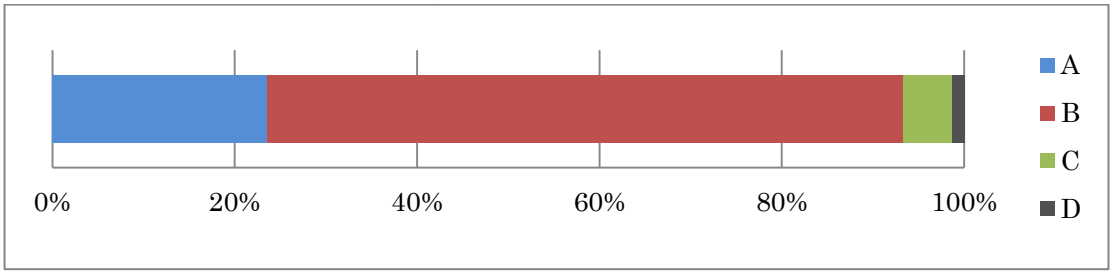


講演者から生徒に出された課題

④生徒の変容

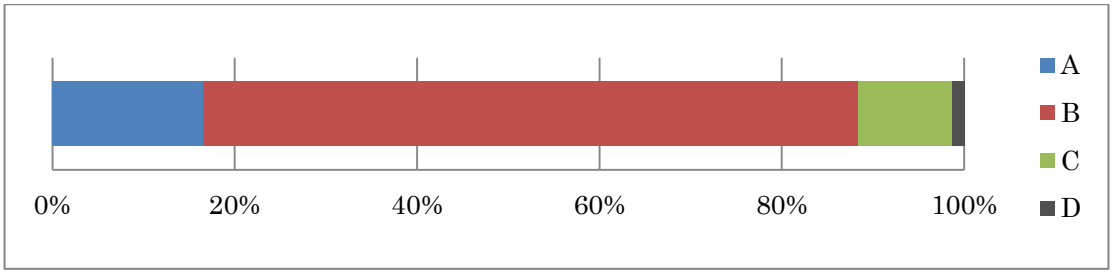
＜生徒アンケートより＞

Q１　大阪大学の取組について理解できたか



A　大変理解できた　　B　理解できた
C　あまり理解できなかった　　D　まったく理解できなかった

Q２　学習に対する意欲が湧いたか



A　大変湧いた　　B　湧いた
C　あまり湧かなかった　　D　まったく湧かなかった

・自分の意見を持つと同時に自分になかった考えを広く受け入れ、理解することが自分の視野を広げることにつながり、グローバル社会で通用するために必要なことだと思った。
・今日の講演を聞いて、授業に主体的に参加し、学校で取り組んでいる「知のよりみち」などで、一つの答えにとらわれない思考力をつける意味を再認識しました。
・一番印象に残ったのは「答えのない問い」と「誰も考えなかった問い」について学生がディスカッションすることでした。今まで、用意された答えに近づくことしかしていない私が、これから必要になるものが「自由な発想」と「発言力」だと思いました。
・大学に入れば能動的な学習が必要になり、国籍を限定しないでディスカッションすることもあることを知りました。高校の学習内容を、受験のもっと先を見据えた方法で自分のものにしていきたいと思いました。

⑤改善の方向性・取組

講師の研究テーマを題材に、文系・理系を問わず、大学での学習や研究がグローバルになっている状況を分かりやすく説明していただいた。特に日常的にディスカッションが英語で行われていることに、学び合うこと、英語を使えることの重要性を再認識することができた。アンケートの学習意欲の項目にたいして「大変湧いた」と答えた生徒の割合が少ないので、今の学びが大学にどうつながっていくのかが伝わるような内容を検討する。

（４）成果発表会

①参加生徒　文系フロンティアコース　１年４０名　２年４０名

②目指すべき姿・つけたい力

文系フロンティアコース２年生が探究活動や海外研修を経て、能登の里山里海の活性化について考えたプランを発表する。他者から様々な観点で質問、意見、アドバイスを受け、批判的思考力や実践的な表現力の育成につなげる。

③日時内容

日時：１２月１９日（月）１４：１５～１６：０５

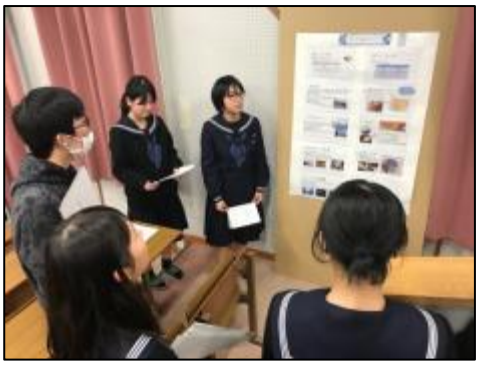
助言者：仁田知樹　氏（独立行政法人国際協力機構北陸支部支部長）

永井三岐子 氏（国連大学サステイナビリティ高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット事務局長）

本校ＯＢ３名（神戸大学２名、明治大学１名）

内容：　能登の里山里海の活性化プランをグループ別にポスターセッション形式で１年生、本校ＯＢ、助言者に対して発表し、質疑応答を行った。

大学生からの質問

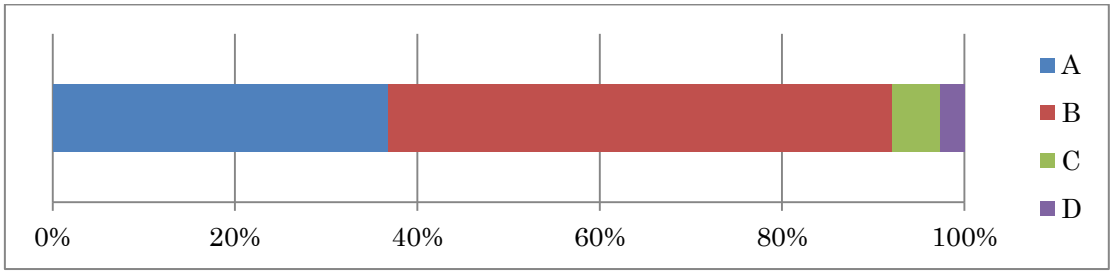


発表の様子

④生徒の変容

＜生徒アンケートより＞

Ｑ１．活性化プランに実現性を感じた。



・データを示すことによって客観的に説明することができた。質問も想定の範囲内だったので答えることができた。

・交通手段のことは考えていなかったので、まだまだ自分たちのプランが甘かったと感じました。でも、視点はおもしろいとの評価をいただいてうれしかったです。

・地域を活性化することは難しいと思っていましたが、調べてみるといろいろなアイディアがあって能登にも可能性があるなと感じました。もっと実際に提案できるようなプランを考えてみたいです。

⑤改善の方向性や取組

研修から帰国後の限られた時間の中で生徒は一生懸命取り組んだ。外部のアドバイザーからは高校生らしいアイディアや視点を評価してもらった。本校ＯＢからは大学生と絡めて取り組みを行うのも面白いとの提案があった。１２月の成果発表までにもっと外部の人に見てもらい、練られたプランを提案できるように準備期間を検討する。

（５）里山里海ＤＶＤ制作

①参加生徒　文系フロンティアコース　２年　４０名

②目指すべき姿・つけたい力

フィールドワークを中心とした探究活動を通して、次世代に継承すべき里山里海の意義やその恵みが持つ可能性に対する理解を深め、活動成果を発信することで、本校生徒のふるさとに対する誇りを醸成し、地域に貢献しようとする意欲を喚起する。

③日時内容

内容：　能登の里山里海に関する調べ学習をグループでテーマ別（例：伝統的農林漁法、多様な生物資源、伝統技術など）に行い、ビデオ（英語版）にまとめた。活動成果の発信（文化祭や海外研修での発表、ＤＶＤの配付等）を行った。

能登の酒蔵を取材

制作したＤＶＤ

④生徒の変容

＜生徒アンケートより＞

・能登の価値を再発見することができた。この素晴らしさを発信していくことが私たち若者の使命だと感じた。

・さまざまな人が能登の活性化に取り組んでいることを知り、誇りに思った。ビデオの編集には苦労したが、第１回アジア生物文化多様性国際会議で披露したり、多くの人に見てもらったのでやりがいを感じた。

⑤改善の方向性・取組

実際に現地に行き、地域の活性化や里山里海の保全に携わっている人々に話を聞くことでふるさとに対する愛情や誇りを育成することができた。来年度はこれまで調べたことを踏まえて、さらに外部の視点を取り入れ、高校生ならではのアイディアや演出で見せ方を工夫していきたい。

（６）先進校への視察

①６月１８日（土）	東京学芸大学附属国際中等教育学校公開研究会	１名参加
②２月　３日（金）	大阪府立三国丘高等学校視察	２名参加
③２月　４日（土）	大阪府立北野高等学校ＳＧＨ課題研究最終発表会	２名参加
④２月　６日（月）	石川県立泉丘高等学校ＳＳＨ・ＳＧＨ研究発表会	２名参加
⑤２月　７日（火）	福井県立高志高等学校ＳＧＨ・ＳＳＨ課題研究発表会	２名参加

東京学芸大附属の授業の様子

三国丘高校の授業の様子

どの学校もＳＧＨに指定されており、授業でのグループ活動や研究のユニークな視点、リサーチの深度等いずれもレベルの高さを感じた。特に大阪府立三国丘高等学校で行われていたコミュニケーションを活かした相互評価の取り組みは興味深く、本校でも導入の可能性を検討する。